勁介先生に見た和光らしさ

大橋さつき　*OHASHI Satsuki*

私が和光大学に着任したのが2002年度で、鈴木勁介先生が退任されたのが2003年度ですから、ご一緒させていただいたのはわずか 2 年……。私が知る勁介先生の姿はほんの一部だと思いますが、私の中にある「和光らしさ」の大部分は、勁介先生から教えていただいたことですので、感謝の気持ちを込めて追悼特集の仲間に入れていただくことにしました。

私にとって、勁介先生は「仙人」のような方でした。そして、身をもって和光の楽しみ方を教えてくださいました。

勁介先生の研究室には、お弟子さんのような学生さんや卒業生、そして教員、職員の皆さんがいつも溢れていて、宴を催しながら活発な議論を交わしていました。私が初めて勁介先生の研究室にお邪魔したとき、「ようこそ、待ってましたよ」と笑顔で迎えてくださりましたが、そのまま議論の渦に放置されてしまいました。隣の学生さんにお酒を注がれ当惑しているうちに、その場の皆さんの活き活きした表情、交わされている話の内容そのものに惹きつけられて、自然と仲間に入れていただいたような記憶があります。人々が集い、共に飲み食いして笑い、自由に語り合い、知が生まれるということがこんなに楽しいことだということをあらためて知りました。あるとき、勁介先生の関わり方が気になって意識的に観察したことがあります。その時は、話の輪から少し外れて研究室の奥の旧式の大きなパソコンの前に座られて何かの原稿を書いておられました。けれど、議論に耳を傾けておられたようで、時折、キーボードを打ちながら誰かの発言にほくそ笑んだり、発言者を確かめるようにちょっと学生達の方に目を向けてふむふむと言った表情をなさったりしておられました。そして、また、学生さんの方もちょびちょびとお酒を飲みながら仕事をされている先生のコップが空になると、何も言わないのにすっと誰かが注ぎにいく……という光景に密かに感動したのを覚えています。私は、着任直後から当時の和光大学の学生に対して、「大学は自分達がつくっているのだという意識が高く独自の文化を形成している」という印象を持っていましたが、特に勁介先生の周りに居る学生さん達はそのような方が多く、新入り若輩教員の私は、勁介先生が温かく見守ってくださる中、学生さん達に、随分「和光大学論」を指導していただいたものです。

退任の年、「古稀」のお祝いの「ちゃんちゃん焼き」の宴で、何代ものゼミ生達が集まり、照れて嬉しそうに笑っている先生の姿が思い出されます。古稀の由来が「人生七十古来稀なり」（古来七十まで生きる人はめったにいない）、「今の時代、70歳まで生きる人は沢山いる

けど、たしかにこの人は『稀なり』だ」と話して笑った記憶があります。

会議中も、ふらりふらり、悠々と過ごしておられるようで、ここぞというところで、鋭い目を開いてズバッと発言なさる姿に、念力のある「仙人」の印象を強くしていきました。先生の発言の中には、常に一人で立ち和光大学と真剣に向かい合ってきた日々の重みのようなものも感じていました。当時は自宅の方向が同じでしたので、様々な会合の後で、私は先生をお送りするというお役目をいただいて、小田急線の電車の中でお話する機会も多く得ました。全てを見透かされているようでどきどきしながら、不思議に癒され元気づけられました。何を言われるかちょっと怖いけど、何度もお話を聞きたくなる、そんな先生でした。

私の授業で学生達が舞台公演という形で成果発表をしたいと初めて企てた時も応援してくださり、大学内で催しを実行するにあたっての具体的な助言をくださいました。舞台本番は暗く十分な椅子を用意できない会場にわざわざ来てくださり、「よくやりました」と私と学生を同時に笑顔で誉めてくださって、とても嬉しかったのを覚えています。そして、次にお会いしたときには、突然に「大橋さん、次は岡上の盆踊りです！」と言われ、何が何だか解りませんでした。その話の前から、岡上地区の方との催しにも誘っていただくことはありましたし、「どんど焼き」に参加したときには、勁介先生の人を繋ぎ場を創る力に驚きました。けれど、当時の私は目の前の学生達との取り組みに夢中で、勁介先生の意図を十分に理解できず、自分自身の取り組みと地域との関係を意識することができませんでした。最近になって、堂前先生のお力添えを受け、岡上地区の子育て支援の遊び活動の取り組みに学生達が関わらせていただくようになり、あらためて、あの頃の勁介先生の言葉を思い出すようになり、ご相談したいなと思っていたところでした。

退任記念の最終講義の席で、少しいたずらっぽい表情でいきなり「和光にはこれまで数々『失望』してきたが、まだ『絶望』はしていない」と話され、会場がどっと沸き立った瞬間が忘れられません。あれから 8 年、和光大学の様々なことが移り変わる中、勁介先生だったら、こんなとき何とおっしゃっただろうかと自然と考えてしまうことが何度もあったように思います。勁介先生の為さること、周りの学生さんや卒業生の皆さんの姿、貴重な有り様を生で体感した者としては、自分の力不足を痛感しつつ、今、和光らしさとは何だろうと迷うばかりの日々だからこそ、今回の訃報を知り、大事な心の支えを失った気持ちです。

最近、他の先生方と思い出話を何度もしていたのに、なぜにもう一度、直接に会いに行こうとしなかったのだろうかと今更ながら悔やみます。なんだか、もう一度近いうちに会えると勝手に思い込んでいたような気もしています。人の命には約束がないと言うことは解っているのに、私にとっては、やはり「仙人」のような方だったからでしょうか……。

勁介先生、ありがとうございました。合掌

［おおはし　さつき・和光大学現代人間学部身体環境共生学科准教授］